

# 英語教育のためのビデオ教材に関する実践的研究

野本 尚美・平塚紘一郎

(2019年3月10日受理)

## Practical Research on Video Materials for English Language Education

Naomi NOMOTO・Kouichirou HIRATSUKA

要旨：英語教育におけるビデオ教材の活用方法について検討することを目的として、教科書の中で扱われている英語の語句や英文法について解説した動画を作成し、予習用ビデオ教材としてLMS(Moodle)上で配信した。結果として、84名の短期大学生のうち約7割の学生が授業前に予習動画を視聴し、視聴した学習者の約9割が動画について「わかりやすかった」と回答した。一方で、配信の時期や動画の長さなどについては今後の検討が必要と考えられる。

Key words：英語教育 予習 ビデオ教材 Moodle

### 1. はじめに

近年、スマートフォンやタブレット端末といった様々なデバイスの急速な普及に伴い、日常生活において動画を楽しむ若者が増加している。女子短期大学生84名を対象として、YouTubeなどのオンライン動画を視聴する頻度について尋ねたところ、48名(57.1%)の学生が「ほぼ毎日視聴する」と回答した。「週に3, 4回ほど利用する」と回答した18名(21.4%)と合わせると、約8割の学生が2日に1回またはそれ以上の頻度で動画を視聴していることになる。

教育の分野においては、MOOC (Massive Open Online Course) に代表されるようなインターネット上での大規模な公開講座や、アクティブ・ラーニングの手法の一つとしての反転授業など、様々な実践の中で動画が活用されている。

英語の授業では、英単語や英熟語の意味を調べてくることがや英文を訳してくることを予習として課す場合が多いものの、英語学習に対してあまり意欲的ではない学習者がそれらの予習課題に積極的に取り組むことは困難である。また、主体性やコミュニケーション能力の育成を目的としたグループワー

クなどを授業に取り入れた場合、教科書を用いた語彙や文法の学習に費やす時間が減少するため、基礎的な英語力を養成するための時間の確保は大きな課題の一つである。そこで、授業内においてグループワーク等の時間を設け、かつ学習者が授業外の時間においてより積極的に英語学習に取り組むための方策の一つとして、授業デザインの中に予習のためのビデオ動画を取り入れる試みを実践した。英語の授業において動画教材を取り入れた研究としては、下山(2017)などが挙げられるが、授業を実際に担当している教員が解説等を行う動画についての実践研究は少ない。本研究では、授業の担当者である教員が語彙や文法について解説するオリジナル動画を作成し、学生の視聴状況や感想等について調査を行った。

## 2. 予習動画の作成と配信方法について

### 2.1 動画の作成

動画の撮影は講義室等で行った。ホワイトボードの前に教員が立ち、解説している様子を撮影した。動画編集にはAdobe Premiere Proを使用した。動画では単語の和訳、熟語の意味、文法などについて解説しており、見やすくするための方法としては字幕を入れることが考えられるが、英語の発音を含めてしっかりと聴いてもらいたかったため、字幕はほとんど入れなかった。また、英語の発音が聴こえにくくならないよう、解説部分に効果音や音楽は入れなかった。動画の書き出しに際しては、スマートフォンでの視聴も考慮して画質を下げ、640×360ピクセル、VBR（ビットレート最大1Mbps）、MP4形式とした。以上のようにして予習動画を作成し、学習者への配信を行った。

### 2.2 動画の配信

本研究の動画は予習用であり、学内だけでなく学外からも動画を閲覧できるようにする必要があるため、ネットワークにて動画を配信することとした。既存の動画配信サービスとしてはYouTube等があるが、学習者個人の動画閲覧履歴などを把握するため、LMSの一つであるMoodleを利用した。Moodleは本学で実施されている他の授業でも用いられており、学習者のログイン履歴、授業コース閲覧履歴、動画コンテンツ閲覧履歴などを取得することができる。また、本学のMoodleは学外からもアクセスできるようになっているため、学習者は自宅等でも動画が閲覧できる。Moodle上に動画を掲載するにあたっては、「レッスン」モジュールを使用した。通常、学習者に資料や動画を提示する際には「ファイル」モジュールを使用するが、教員が明示的に閲覧不可にしない限りはいつまでも学習者は動画を閲覧できてしまう。予習という観点からいつまでも閲覧できることは好ましくないとされる。「レッスン」モジュールでは閲覧期限を設定できるため、予習動画の対象である授業が開始される直前までしか動画を閲覧できないような設定をすることが可能である。実際に学習者が視聴する予習動画の画面を図1に示す。



図1 予習動画視聴画面（パソコンによる視聴）

Moodleに設置したレッスンモジュールを開くことで、画面中央に予習動画が表示される。動画が複数ある場合は下部のボタンで次の動画へ移動することができる。図1はパソコンのブラウザで開いた画面となるが、スマートフォンからも同様に予習動画を視聴できるようになっている。以上のような環境で学習者に予習動画を配信した。

## 3. 手順

本学生生活科学学科1回生84名が受講する「英語」の授業において、5回の予習動画を作成し、Moodle上に配信した。予習動画は、以下の二つのパートに分かれている。まず一つ目は語彙学習である。本文で用いられている重要な単語や熟語について、日本語訳を選択肢の中から選ばせる問題が本研究で用いた教科書（角山他，2015）に掲載されている。予習動画ではそれらの問題の解答だけでなく、それぞれの単語の読み方や発音の仕方などについても簡単な解説を行った。また、個々の単語や熟語について、教師が発音した後にリピートさせる時間も設けた。二つ目は文法学習である。教科書では文法の解説のあとに3文ほどの英文を和訳する問題が掲載されている。予習動画においては、教科書の流れに沿って文法について説明したあと、英文和訳問題の解答と解説を述べた。それぞれの動画を編集した結果、一つ目の語彙学習動画の長さは約10分、二つ目の文法学習動画の長さは約15～20分となった。Moodle上に動画を配信後、学習者に対しては

フォーラム機能を用いて通知し、授業前までに予習動画を視聴してくることに、授業の初めには動画の内容（語彙と英文和訳問題）についての確認テストを実施する旨を連絡した。

対面の授業においては、まず予習動画の内容についての確認テストを実施した。また予習動画の視聴場所（家・学校のどちらで視聴したか）と、視聴機器（視聴の際にパソコン・携帯電話のどちらを用いたか）に関するアンケートも同時に実施した。確認テスト及びアンケートを回収した後、教科書本文のリスニングや音読練習、文法問題やリーディング・リスニングの応用問題について解答・解説を行った。また、教科書の内容とは別に、グループワークとして英語を用いたプレゼンテーションの準備・発表も行った。教科書の内容については学期末に筆記試験を行った。

## 4. 結果と考察

### 4.1 動画の視聴率および視聴環境

動画の視聴率についてMoodleのログを用いて調査したところ、各回平均して約7割の学習者が動画を視聴していたことがわかった（図2）。

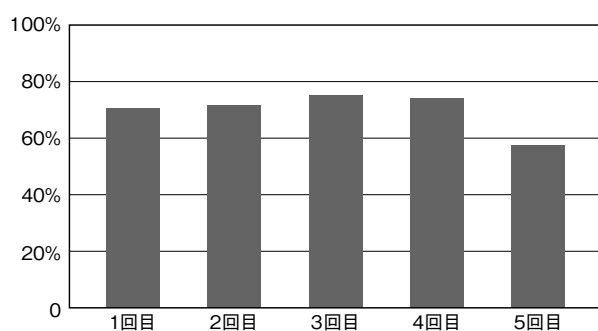


図2 予習動画の視聴率

学習者に対するアンケート調査から動画の視聴場所と視聴機器についてまとめた結果、表1に示すように、視聴場所については学校で視聴する学習者よりも家で視聴している学習者が多かった。また視聴機器については、初回はパソコンで視聴した学習者が約7割と多かったが、その後は携帯電話の割合が増加し、5回目の動画は約6割の学習者が携帯電話で視聴したことが分かった。おそらく初回はできるだけ大きな画面で見た方がわかりやすいとの考えか

らパソコンを利用した学習者が多く、内容を確認した2回目以後はより手軽に操作できる携帯電話が多く用いられたのではないかと推察される。動画の作成・編集の際には、携帯電話においても学習者が見やすい設計となるよう心掛ける必要がある。

	視聴場所		視聴機器	
	家	学校	携帯電話	パソコン
1回目	66.1%	33.9%	25.9%	74.1%
2回目	71.4%	28.6%	42.2%	57.8%
3回目	74.1%	25.9%	48.3%	51.7%
4回目	72.4%	27.6%	51.7%	48.3%
5回目	74.0%	26.0%	58.8%	41.2%

表1 予習動画の視聴場所と視聴機器

### 4.2 動画の視聴回数と筆記試験の相関

予習動画の有効性について検証するため、動画の視聴回数と学期末筆記試験の点数の関連性について調べたところ、相関係数は $r=0.404$  ( $p<.01$ ) となった。動画の視聴回数が比較的少ない学習者であっても学期末筆記試験では高得点を取っていたことが、強い相関が見られなかった要因と考えられる。

### 4.3 動画に関する学習者の感想

5回の動画配信後、学習者に対してアンケート調査を実施した。「予習動画の内容や説明はわかりやすかったですか」という問いに対しては、図3に示すように、「とてもわかりやすかった」との回答が51%、「まあまあわかりやすかった」との回答が45%となり、「ややわかりにくかった」または「とてもわかりにくかった」と回答した学習者はいなかった。動画は多くの学習者にとってわかりやすい内容であったと考えられる。

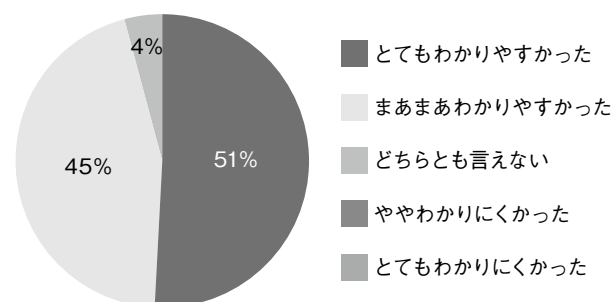


図3 予習動画のわかりやすさに関する調査結果

一方で、予習動画の長さについては、約8割が「とても長かった」または「やや長かった」と回答しており、「やや短かった」または「とても短かった」と回答した学習者はいなかった。今回作成した動画は、学習者にとって時間的な負荷がかなり大きかったと考えられる（図4）。

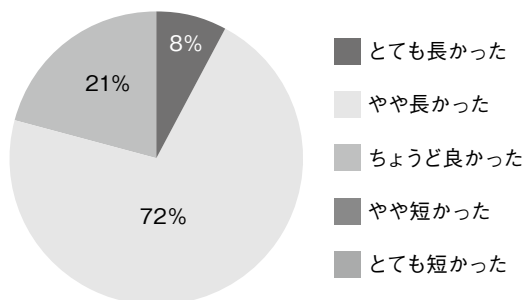


図4 予習動画の時間についての調査結果

アンケート調査では動画を1度でも視聴した学習者74名に動画の感想や要望などについて自由記述で回答してもらった。70件の回答があったが、傾向など詳しい分析を行うため共起ネットワークによる分析を行った。KH Coderによる共起ネットワーク図を図5に示す。

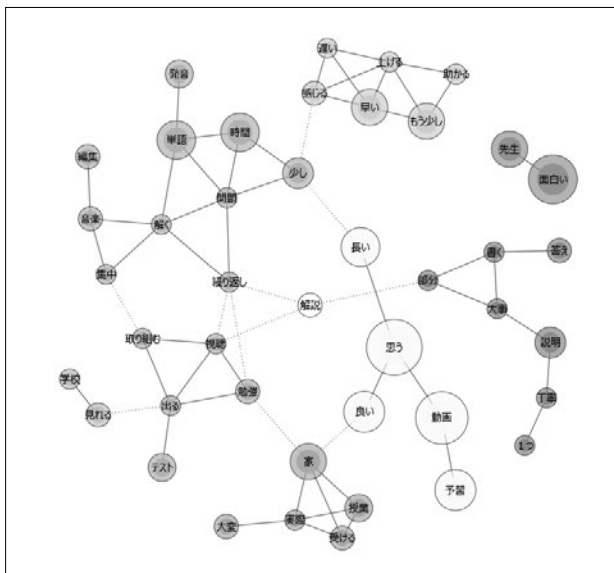


図5 予習動画に関する自由記述アンケートの共起ネットワーク図

自由記述の感想であるため「思う」という語句が一番多く出現しており、共起する語句には「予習」、「動画」、「良い」とった語が見られる。感想を見ても「予習動画があって良かったと思う」といった記述

が多く見られた。多くの学習者が予習動画に対して良い印象を持ったことが伺える。「良い」は「家」という語句にも共起しており、「家で好きな時間に勉強できるので良かった」など、Moodleを利用したことで自宅でも視聴できたことも利点として挙げられていた。また図5の左上には「単語」と「発音」の語句が挙げられており、「分からない単語の発音を聞くのに、動画だと何回も再生できるので良かった」といった感想も見られた。図5の右上では、「先生」と「面白い」という語句が共起しており、解説を行った教員に対して良い印象を持ったと考えられる。日常的に接している教員が動画に出演していることで、動画に対してあまり抵抗感を持たずに視聴することができたと思われる。一方で、「思う」は「長い」、「時間」、「少し」という語句にも共起しており「動画の時間が少し長かった」という感想が比較的多く見られた。予習動画は1回の授業につき2本、時間になると30分程度であったが、長いと感じた学生が多かったようである。また、図5の上部では「もう少し」、「早い」、「上げる」、「助かる」、「遅い」といった語句が共起しており、感想では「動画を上げる時間が遅いと感じたので、もう少し早く出ると良かった」などの記述が見られた。動画の撮影、準備に時間がかかってしまい、授業の数日前にしか予習動画を配信できなかったことが影響していると思われる。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では英語の授業において予習用のビデオ教材を配信した結果について述べた。動画の視聴回数と筆記試験の成績については弱い相関が見られた。動画の内容については、比較的多くの学習者が「わかりやすかった」と評価した。自由記述式アンケートの結果においても、好きな時間に視聴できることや繰り返し再生できることなどの利点を評価する感想が多く見られた。一方で、動画の視聴率は平均して約7割にとどまった。その理由としては、動画を配信する時期が遅くなったことや、動画の時間が長かったことなどが考えられる。

今後の課題として、予習用教材として扱う内容に

ついてまず検討すべきであると考え。今回は単語と文法について教員が解説したものを配信したが、教科書本文の解説や音読練習、簡単な確認テストなども、Moodleを用いて予習として行うことができる。対面の授業で扱うべき内容や、学習者に予習または復習として課すべき内容について、今後も実践を重ねて精査することが必要である。また、動画の長さや視聴環境についても考慮しなければならない。特に、今後は携帯電話での視聴に適した動画作成することが重要であると考えられる。英語に対して苦手意識を持つ学習者であっても意欲的に取り組めるような教材について今後も研究を進めたい。

## 引用・参考文献

- 1) 井上博樹 (2014)『反転授業実践マニュアル』海文堂
- 2) 小野田公・糸数昌史・久保晃 (2016)『理学療法学分野への反転授業の導入時の問題と対応』理学療法科学, Vol31, No.4, pp.565-569.
- 3) 角山照彦・Simon Capper (2015)『Let's Read Aloud More!音読で極める基礎英語』成美堂
- 4) 笹倉理子・桑名杏奈・浅本紀子 (2014)『Moodleを活用した授業動画の簡易配信について』PROCEEDINGS OF MOODLE MOOT JAPAN 2014, pp.48-53.
- 5) 下山幸成 (2017)『動画教材を活用した英語リスニング授業：発音認識と発音指導を中心に』東洋学園大学紀要, 26 (1), pp.69-81.